

杉戸町古墳拾遺録

温古知新
杉戸の
歴史を
こぼれ話

第22回

古墳時代の概観 パラダイム・シフト

これまでは狩猟採集社会である縄文時代の様相について論じてきましたが、今回からは時代を移し、古墳時代の社会動態等を述べていきます。

杉戸町の古墳時代は、縄文的な「高台での安定」から、低地農耕による「生産性の追求」へと、社会の優先順位が劇的に転換した時代として定義することもできます。縄文人が下総台地などの安定した場所を選好したのに対し、古墳時代の人々は、氾濫のリスクを抱える「中川低地の自然堤防」へと生活圏を戦略的に移動させました。この選択は、単なる居住地の拡大だけではなく、自然への受動的な適応から、リスクすら管理し利用する能動的な介入ともいえます。これは、認知的かつ大きな発想の転換を意味しています。

この自然堤防上での生活は、河川氾濫という「脅威」を、農耕の「基盤」として転換する高度な生存戦略でした。古利根川や旧渡良瀬川の氾濫が運んだ土砂は、居住に適した微高地（自然堤防）を形成し、同時にその後背地には水稻耕作に不可欠な湿地環境を作り出しました。人々は町内で発見された椿遺跡や大堀南遺跡などが示すように、洪水の危険と隣り合わせの微高地に住居を構え、低地を水田として開発することで、縄文時代にはあり得なかった規模の生産力を獲得したはず。豊明神社古墳が低地の自然堤防上に築かれた事実は、この開発された土地がいかに重要視されていたかを物語っています。

低地開発による生産性の向上は、必然的に富の偏在と社会の階層化を招き、強力な政治的権威を出現させました。その頂点を示すのが、下総台地の縁辺に築かれた「目沼古墳群」です。前方後円墳を含むこの古墳群からは、円筒・形象埴輪（人物・馬）や、直刀・鈴杏葉といった威信財が出土しており、低地農耕を掌握した首長層が、ヤマト王権や周辺地域との政治的ネットワークを有していたことを証明しています。杉戸の古墳時代とは、人々がリスクを取って低地へ進出し、水を統御する技術と組織力を獲得した結果、社会システムが「ムラ」から「クニ」的な構造へと劇的に複雑化したプロセスそのものといえます。

（社会教育課 町史・文化財担当編）

スギトをもっとスキになる。

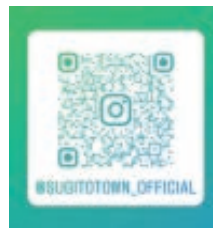
町公式 Instagram、始動。

町の魅力に関する情報を発信します。ぜひフォローをお願いします！

2月～



#スギトスキ



フォローは
こちらから！

ハッシュタグ
「#スギトスキ」を
つけて写真を投稿すると
広報すぎとに掲載
されるかも！？
詳しくはこちら



投稿企画
「#スギトスキ」



UD FONT
by MORISAWA

読みやすい書体であるユニバーサルデザイン
(UDフォント)を使用しています。



杉戸町
ホームページ



メール配信
「すぎめー。」



広報スマホ版
マチイロ



杉戸町
公式LINE



杉戸町
公式X